令和４年度　校内研究のまとめ

学　　校　　長　山本　博一
校内研究代表者　石川　真美

１．研究主題　　「見方・考え方をはたらかせ思考を深める授業づくり」

２．主題設定の理由

令和３年度の高知県学力定着状況調査の結果を分析したところ，問題を正確に読む，複数の資料をもとに読み解く，論理的に答える等の課題が明らかとなった。このような課題が見られたことから，既習事項や経験値とつなげながら，見方・考え方を働かせる単元構想，授業のまとめの内容と書き方の指導等の取組が不十分であることを全教員で確認した。そこで，今年度の研究主題を「見方・考え方をはたらかせ思考を深める授業づくり」とした。生徒が主体となり思考力・判断力・表現力を身につけるために，昨年度に引き続き，対話や議論を生む課題設定についてさらに研究を進めるとともに，生徒の授業の振り返りをイメージした授業づくり，振り返りの共有，縦・横のライン機能を生かしたカリキュラム・マネジメントの強化を行う等の取り組みを通して，生徒の思考力・判断力・表現力を向上させたいと考え，本研究主題を設定することとした。

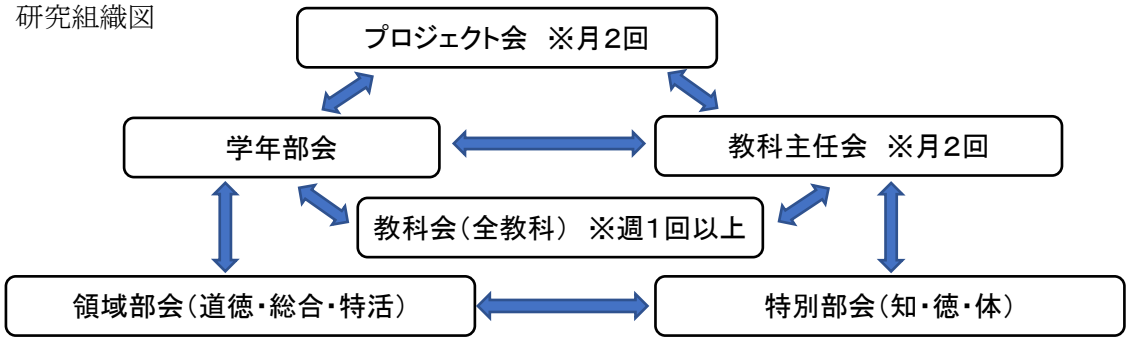
〔研究仮説〕

仮説１：生徒が考えたいと思う課題（必然性のある課題や他者と協働することによって解決できる課題）を工夫して設定すれば，授業に対話や議論が生まれ，生徒の思考力・判断力・表現力が高まるだろう。

仮説２：対話や議論を通して広がったり深まったりした自分の考えを振り返りとして表出させることにより，一人一人の思考の高まりや深まりを自覚させることができ，深い学びにつながるだろう。

３．研究の進め方と方法

（１）研究組織図



（２）研究内容

Ⅰ　授業研究を中心とした授業改善

- 全校公開授業研究（年６回）
- 授業づくり講座の開催（数学科），授業づくり講座への参加（５教科）
- 授業スタンダードに基づいた授業者の心構え自己チェック（月１回）
- 授業評価アンケート（学期に１回）
- 授業実践レポート（教科会で１本）
- 講師（齊藤一弥先生）招聘による授業研通覧（本年度１回）

Ⅱ　効果的なタテ持ちの教科経営

- 教科主任会（月２回）
- 教科会（週１回以上）
- 授業を見合う取り組み（月１回）
- チーム会の実施（ミドル会・メンター会）
- アドバイザー訪問（年３回）

４．研究実践

（１）授業研究を中心とした授業改善

①全校研（年６回），授業づくり講座（２回）

例年，全クラスが１回は公開授業を行うようにしており，今年度は全校研として６回，そして，授業づくり講座で２回の公開授業を行った。本校の取り組みとして，全校授業研の前には，「授業の見方」とを配っている。また，「研究主題にせまる授業になっているか」を見取るための視点を「ポイント」として明記するようにしている。また，学習指導要領で授業の内容にあたる部分を添付するようにし，他教科の教員も教科特有の「見方・考え方」を共有するようにしている。授業づくりを行う際には西部教育事務所から指導主事を招聘し，生徒の主体性を育む「課題設定」ができているか，深い学びにつながる「対話や議論」が設定できているか等について指導案を検討し，指導・助言を受けた。

研究協議で出てきた課題については，全体の課題として全教員で共有した。第１回の全校研では「対話や場を仕組み，対話の質を高める」，第２回「個人の成長や変容が実感できる場面設定」，第３回「全員が取り組める課題設定や動機付け」，第４回「つぶやきを拾い，問う姿勢」，５回「声かけや中間評価のタイミング」，第６回「単元ゴールの明確化」を課題と捉え，全教員が日々の授業の中で意識して実践することによって，授業の質を高めてきた。

②授業者の心構え自己チェック（毎月実施）

自己チェックシートは「授業スタンダード」や研究主題と対応したものになっている。毎月１７項目について自己チェックを行い，教科会で課題についてどのように対策をすべきか確認している。自己チェックをすることによって授業改善に向かう意識を常に持ち続け，それを教科会で確認することによりタテ持ちの授業の質をそろえることを狙いとしている。また，研究主任が全教員のチェックシートを集計し，成果や課題についてまとめたものを再び全員に返し共有している。

③授業評価アンケート（学期に１回）

学期末に各教科について生徒にアンケートをとっている。研究主題に関わる項目，生徒指導の三機能に関わる項目，ICT の活用に関わる項目の７つである。そして，６件法とし，５，６のみを肯定的評価とカウントすることとした。これは，各個人の肯定的評価を結果として出し，目標値に届いていない項目に関しては，教科会に持ち帰り対策や取組の確認を行うようにしている。

④教科実践レポート

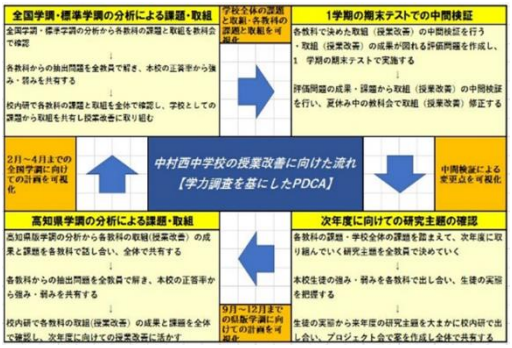
全教科が重点単元を決め，新学習指導要領で求められている資質・能力の育成を目指した授業づくりを行い，その工夫点や成果・課題をレポートにまとめて年度末の校内研修で発表会を行い，共有している。これまでは，個人レポートとしていたが，今年度は，教科で一つとした。教科会で作成する過程で，交流する場面が必要であり，その中でさらに取組や方向性の統一が図れるのではないかという狙いからである。

（２）効果的なタテ持ちの教科経営

①教科主任会（月２回）

主幹教諭が中心となって計画し，全教科体制で実施している。今年度は，単元ゴールを重点課題として設定した。また，昨年度，単元の目標やめあてについて全教科で形式を統一して作成したものを修正しながら取り組んだ。教科主任会で話し合った内容については教科会で周知するようにしている。

また，主幹教諭が中心となり，「学力調査を軸にした PDCA」を作成している。学力調査ごとに検証し，共有を図ることで，教科間のつながりを意識することができ，具体的にどのように取り組めばよいかも共有できている。それが，タテやヨコの機能のつながり強化となっている。



②授業を見合う取り組み

他教科の授業実践を自分の授業に生かすことや，ベテラン教員と若手教員の OJT をねらいとして，月に１回以上，他の教員の授業を参観している。参観者は授業参観カードに記入し，主幹教諭が統括し授業者に還元し，その後教科会で共有し授業改善につなげている。

③単元の振り返り

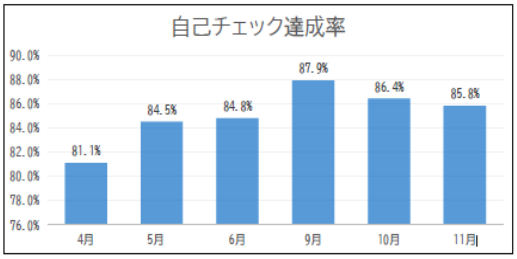
200 字でまとめるこの単元の振り返りは，教科の専門用語を使うことや，本校の課題でもある「根拠に基づいた考えの表出」などを狙いとして全教科で取り組んでいる。生徒の振り返りには具体的な評価を加え，他の生徒の参考になるように紹介している。

④チーム会の実施

若年教員の割合が多い。授業改善をすすめる上で，どの年代も力を発揮できるようチーム会を実施した。ミドル会はミドルの役割の自覚や若年教員へのサポート，メンター会は学校組織の理解や自主的な授業改善を目的とし，他教科の実践に学び教科横断的な視点を育成することを狙いとして実施している。

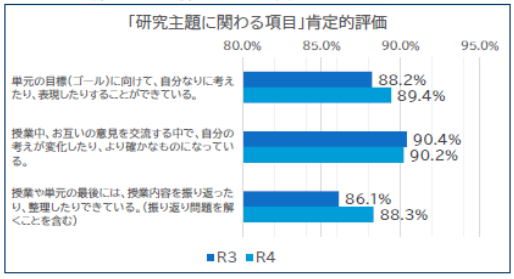
⑤アドバイザー訪問（年３回）

「組織力向上のための実践研究事業」として，西部教育事務所の松田アドバイザーに全授業を通覧していただき，授業改善，及び教科主任会の在り方について指導助言をいただいた。その内容は主幹教諭が次回の校内研修で周知し，教科主任会を通じて教科会で周知へ下ろすという PDCA サイクルを回した。



５．今年度の成果と課題

授業者の心構え自己チェックを見てみると，４月は達成率が 81.1%，９月 87.9%，11 月 85.8%であった。１学期は，教科会等によって，達成率が上昇していくが，２学期は，アドバイザーや県教育委員会等の助言や指導から，それぞれの課題が具体化され，自分たちの課題や弱さが認識されたと考えられる。目標値である 90%に達する月はなかった。



また，授業評価アンケートでは研究主題に関する項目において，どの質問も肯定的評価が 90%に近い。昨年度も 90%以上の対話については，あまり変化がみられていないが，単元ゴールや振り返りについては，教科会でも重点的に取り組んだ成果と考えられる。12 月に実施された高知県学力定着状況調査については，自校採点の結果より，各教科で作成した分析シートをもとに全教員で共有を行い，生徒が苦手としていた問題を解いた。そして，各教科での課題と，それに対応する取組も共有している。業者採点の結果からも１・２年生共に，５教科の平均が全国比＋３P 以上という目標値を超えることができた。

【成果】○単元の目標を立てて単元構想を組み立てていくといった取組を続けることで，教科会の質の向上が見られた。
○単元ゴールをイメージした課題設定の工夫に全教科で取り組むことで，西中スタンダードにもとづいた授業がどの教員もできるようになってきた。
○チーム会を通じて，若年教員と関わるミドルの意識が向上した。

【課題】▼教科主任同士や教科間連携を行い，連携した授業を行う単元等の確認
▼生徒が複数の資料をもとに読み解く，論理的に答えるといった問題の正答率

これらの課題について，来年度に向けて組織としてどのように対策をしていくか検討する。来年度，これまで積み重ねてきた西中スタンダードをさらに発展させられるよう研究を続けていきたい。